

避難も残るもリスク

障害者があり助を要する人は、避難するか否かの選択肢を迫られた時、自分の意思で決断することは難しい。二人三脚であるヘルパーの家庭の事情や、使い慣れた介助器具を手放すリスクも考慮しなければならなかった。福島第一原発の事故で、障害者それぞれに異なる苦悩があった。(沢田千秋)



福島県庁で避難指示を受け、支援を受ける人々。一人は車椅子に乗っている。スタッフやボランティアが手助けしている様子。

ヘルパー、器具…代替困難

三月十一日、福島県、日、福島第一原発1号機が爆発した。福島県内には、避難指示が出された。福島県庁には、避難指示が出された。福島県庁には、避難指示が出された。福島県庁には、避難指示が出された。

くもいれば、黙ってと避難が入る。ガソリしかない。本当か、認識を共有する。いつの間にかいなくなるとは、福島県庁のことは、二十人は来ると思っ。よにしている。小野さんには、ヘルパーがそれぞれ二百と語ると語る。障害者さんは、介助を受ける。三百と用意。各々の中には、見の症。地の中には、見の症。地の中には、見の症。地の中には、見の症。

移動手段や同伴者をどう確保するか、スタ。運搬し、いわきまで届た電動ベッドなどが変わることに抵抗感が。ちておるしかない」と。避難の状況は、ヘルパーも、避難の状況は、ヘルパーも、避難の状況は、ヘルパーも。

次回(11月21日)掲載。昭和東南海地震について考えます。

「選挙は人柄」やめた

20日に町長選と町議選を控える大熊町。県議選も加えればトリプル選となり、瑞さん一家もいやが上にも選挙の話題で盛り上がる。

これまで「選挙は（候補者の）人柄」と話していた光一さんが力を込める。「仮設暮らしはもううんざりだ。ちゃんとした家

で暮らせるよう、政治家は何をやってくれ

るんだ」。求めるのは実行力だ。

週末になると、立候補予定者が仮設住宅に押しかけるようになった。判を押したように「よろしく願います」と繰り返すばかり。幸さんがしびれを切らした。「一体いつになったら、私たちは安心して暮らせるの？」

震災から8カ月近く。「町に帰れないのなら、はっきり言ってもらって構わない」

原発1キロからの避難
いつの日か

—22—

と幸さんは考えるようになった。でも、泣き寝入りはしない。「東電や国にきちんと補償してほしい」。思いを代弁し、実現させるのが政治の仕事のはずだが…。「政治家だけは震災前と何も変わらない」

そう感じるのは自分たちだけではないらしい。選挙戦本番を前に、仮設住宅ではあきらめムードすら漂い始めたように思える。「自分の身は自分で守る。悲しいけど、それが現実」。とりあえず今、向き合

わなければいけないのは沙也加さんの高校受験。今月中には志望校を絞り込まないといけないのだ。

瑞（はなわ）さん一家 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生生活。

福島第一原発事故を受け、原子力安全委員会は原発事故に備えた防災対策を重点的に行う区域（EPZ）を大幅に見直した。半径八十キロ圏だったEPZは「緊急防護措置区域（UPZ）」に名称変更して半径三十キロ圏に拡大。甲状腺被ばくを避けるためヨウ素剤の服用準備をする範囲を「放射性ヨウ素防護地域（PPA）」として半径五十キロに指定した。新たに区域内に入った自治体は、防災計画の修正を迫られている。

岐阜県揖斐川町は福井県の敦賀原発から二十五キロでUPZに入った。町には現在、原発事故を想定した防災計画はない。担当者は「何もない中で一から作成しなければならな

原発防災圏拡大 計画修正に戸惑い

職員もどこまで原
防の知識を勉強したら
いいのかさっぱり分か
り掛かっている。

愛知県の防
災計画にも原発事故想
定はない。県は今月末
の防災会議で、浜岡原
防事故の際、中部電力
と県との間の情報伝達
法などを明記した修正
案を提案する方針。

浜岡原発がある御前
崎市には事故対策を定
めた防災計画がある
が、今回の見直しで五
キロ圏は直ちに避難す
る「予防護措置区域
（PAZ）」になっ
た。担当者は「当面は
避難先となる姉妹都市
を市民に周知徹底する
など市独自でできるこ
とはやるが、みんな避
難したら事故対応者が
いなくなる。その辺も
含め新指針を国や県に
示してもらってから、
計画見直しを検討す
る」としている。

